

先ほど読んでいただいた詩篇46篇、これは150篇ある詩篇の中でも、詩篇23篇と共に、教会の歴史の中で最も愛されてきた詩篇の一つ。多くの信仰者に慰めと力を与えてきた。特に有名なのは、宗教改革者ルター、旧教と言われる中世ローマカトリック教会に反旗を翻して、新教と言われるプロテスタント教会にはじまりを与えた、いわば私たちの教会のルーツにあたる人ですが、そのルターがこの詩篇を愛したこと。今日最初に歌った賛美歌の267番は、この詩篇46篇をもとにしてルターが作詞した、宗教改革のいわばテーマソングとして知られているものだが、ルターをはじめとする宗教改革者たちは、圧倒的不利な状況の中で、この歌を口ずさみながら、神から励ましを与えられて、改革を成し遂げた。

そのような詩篇46篇、今日はこの詩篇を共に読みながら、キリストを信じる信仰者の力ということをご一緒に考えたいと思った。こういうことを一度考えたいなあと思ったきっかけは、私の父や友人からいつも挑戦を受けるといいますか、からかい半分にこのことを問われるということがあるからです。案内ビラにも書きましたが、彼らがいつも言うのは「結局宗教っていうのは弱い人間が何かすがりつくものを求めて始まる、あるいはそういう人間の弱さを利用して悪賢いやつが教祖になって始まる」ということです。うちの父などは面白い人ですから、私がまだ中学生ぐらいだったころに「孝宏、2人で何か宗教の教祖になろうか、これからは宗教がもうかるぞ」なんて冗談で言っていたような人ですから、実際そのとおりになって、「親父なかなか先見の命があるなあ」なんて思っていたものですが、そういう人ですから、私がキリスト教の牧師になってもなかなか素直に話を聞いてくれることはないわけです。まあこういう意見というのは、別に彼らは学者じゃないですから、そもそも宗教とはと論じているわけではなくて、メディアから流れてくる情報だけを基にした極めて主観的な偏ったイメージと推測だけのものですが、これだけ新興宗教というものが多く出回ると仕方ないかと思うのですね。彼らのイメージとして、宗教を信じる人間は運命を自分で切り開くという気迫と才覚に欠けた人間だということでしょうか。今の時代、規制緩和、自由競争、お金で買えないものは無い、そういう時代についていけない、そこで破れてしまった人をひとくくりに弱い人間だとしてしまう。そういう人が寄り集まっている。そういう人間につけ込んで甘い汁を吸っているのが宗教家だ。どうやって生きていったらいいか分からずに右往左往している人を、次々と洗脳して行って、私が言う通りにしていれば大丈夫だといって色んなグッズを買わせていく、そういういかがわしい人たちがたくさんいる。そういうものとキリスト教も仏教も何もかもごっちゃにしまって、結局おおもとは一緒だとする。そして俺たちはだまされないぞと言う。俺たちは自分のことは自分で面倒見る、そんなものいらないとやってくる。

昔はそういうことを言われるのがすごく嫌だった。そんないかがわしい宗教と一緒にするな、キリスト教は違う、実際牧師は貧乏で、甘い汁なんて何も吸っていない、吸いたいくらいだ。そういう具合に真っ向から反論していたが、最近は少し大人になって、そうだね、他の宗教は

知らないけど、確かにキリスト教を信じる人間は弱い人間だと思うよと言う。そのことは認めるよと言う。実際そう思うから。キリスト者というのは、自分が弱い人間だということを良く知っている人間です。むしろ人間の弱さということを徹底的に見つめて、それを素直に認めるのがキリスト教信仰の始まりとも言えると思う。ある哲学者が、聖書というのは人間が神について書いた書物ではなくて、人間について神が書いた書物だと言ったが、まさにそのように聖書には人間の本当の姿が生々しく描かれる。そしてそれは決して美しいものではなくて、騙し合い、殺し合いする罪人として描かれているのであって、あるいは恐れと不安に支配されて怯えてばかりいる、非常にもろいものとしての人間がいつも描き出される。そういう人間のむき出しの弱さ、醜さを、神が見ておられるままに見つめる。それは人間が皆罪人だと認めるということであり、同時に罪人としての私たち人間の本質的な弱さを自覚することに等しい。キリスト者というのは、みんなそういう自覚を持っているもの。そういう風にして自分の弱さをはっきり認める。

例えば私たちは死を恐れます。死ぬのなんて怖く無いなんて、うそぶくことはしません、だって人が死ぬということは本来あるべきではない恐ろしいことなのですから。聖書の教えるところによれば、人間は本来死ぬべき存在ではなかったのに、墮落して罪におちてしまったゆえに、死ぬべき存在となったとされています。そして今や私たちは、誰も死の力に抗うことの出来ず、そのまま放っておかれるならば必ず死の力に蹂躪されて、永遠に失われた存在になってしまう、そういう定めになっている、それはもう自分の力ではどうすることもできない、そういう死の力に対して非常に無力な自分を知っているし、(キリストの助けなき)死を恐れる。

他にも様々な恐れや不安があります。病気が怖い、自然災害が怖い、あるいは人間が怖い、同じ罪人だから信じられない、これは他人だけじゃないのですよ、自分もそうなんです、人間はみんな罪人だと知っているから、どんな嘘だってつけるし、どんな凶悪なことだってやらかしようとして知っている、だから怖いし、社会の悪をいっそう深刻に感じる。そしてそういう悪しき力の高まりに対する自分たちの弱さということを感じる、どうにもならない負の力のうねりがある、キリスト者というのはそういう風に世界を見ている、そういう危険にさらされていることを常に警戒している、非常に臆病な人間であるわけです。そういう恐怖を否定して強がりせず、あっさり認めてしまう。そしてそういう恐怖や不安を克服することは、自分ではどうにもならないと認めた上で、神に頼る。全面的に頼る。それが神を信じる信仰者のあり方。ある牧師さんが言っていたけど、そういう恐怖や不安に自分で立ち向かえる人には、神はいらない、キリストはいらない、でも私たちはそれがなければ怖くて怖くて仕方ない。そして今日読んだ46篇は、そういう信仰を私たちに教えてくれる。思い出させてくれる。

この詩を読んでいくと、この詩人が非常な不安の中で生きていたことが分かる。この詩篇には揺れる、震えるという言葉が繰り返されていることが分かります。3,4節「地が姿を変え、山々が揺らいで海の中に移るとも、海の水が騒ぎ、沸きかえり、そのたかぶるさまに山々が震えるとも」あるいは7節「すべての民は騒ぎ、国々は揺らぐ。」こういう具合に、揺れる、動

くということを強調しているが、これはこの 46 篇の詩人が、世界をこのような揺れ動くものとして見ているからだ、世界が変動して、根底から揺らいでいるというような非常に不安定な感覚を持っているからだと言われる。

それは実際に山が揺れ、海が沸き返るといふ、地震や津波などの自然災害に伴って、私たちの内に沸き起こってくる不安感に通じるものであるでしょう。私の母教会の板宿教会は、阪神大震災の時に避難所として近隣の方々に開放していたということで、そこで様々な人間模様が繰り広げられたということを知り、その時、会堂守りとしてその板宿教会に住み着いていた神学生がいたのです。今は牧師です。その方は様々な面で避難しておられる方を導いたわけですが、そのお話を聞くと、やっぱりその時に感じた世界が壊れてしまったという感覚、根底から揺らいでしまったという感覚は、今も根強く残っていて、色んなことを考えている基点になっているという。それは都市社会の崩壊、そのもろさが浮き彫りにされたという出来事、そしてまたそれは、人間の生活の秩序が崩壊して、感情がむき出しにされた、そういう時でも合った。そういう震災の時にその牧師さんが感じた揺れ動く感覚、それはこの 46 篇の詩人に通じると思う。

あるいはそれはあの 9・11 という忌まわしい事件以来、世界中の人間が感じている、テロリズムや戦乱に対する恐怖や不安、誰が核兵器を持っているか分からない、何かの間違いで世界が滅び去ってしまう、そういう不安感に通じると思う。すべての民は騒ぎ、国々は揺らぐというのは、そういう戦いに色めき立つ諸国の様子を表しているといわれます。実際この詩篇は、戦争の真っ只中で、アッシリア帝国がエルサレムに迫るその状況下で読まれたという説がありますが、詩人はそのような戦乱の不安を覚えながら過ごしていたのかもしれませんが。

あるいはその他にも私たちは、もっと身近な問題にひきつけて、現代の私たちが持っている、日常の様々な恐怖や不安、眠れぬ夜を過ごす時の足元の定まらない不安感を、この 46 篇の詩人の感覚に投影することも赦されているでしょう。それは皆さんそれぞれのご経験に基づいて考えていただければよいと思いますが、私なんかもしょっちゅうあります、仕事がうまくいかない、辛いこと悲しいことがあるとすぐに落ち込んで、未来が見えなくなると眠れなくなる。そういう時は自分の存在の意味が揺るがされていることを感じる。自分は価値がないのではないかと、ダメな人間だと思ってしまう。自殺者が増え続けている今の時代、そういう感覚に襲われている方は大勢いると思う。そういう不安感の中で詩人もまた生きている。

けれども、この詩篇を読むものが誰でも気付くことですが、この詩人はそういう不安の中で溺れてしまうことなく、わたしは恐れなくてのける。地は姿を変え、山々が揺らぐ、そういう不安定な感覚を持っているのです、けれどもそこで終りじゃない、そうではなくて彼が言いたいのは、たとえ地は姿を変え、山々が揺らいだとしても、私たちは決して恐れなくてのけることができる。なぜか？それは神が私たちの避けどころであり、私たちの砦であって、苦難の時に必ずそこにいまして助けてくださるからです。その深い信頼がある、だから私たちは決して恐れなくてのけることができる、これがこの詩篇のすさまじいところであり、愛

されてきた理由なのですね。

この詩篇は不安の中にいる時に、神が必ず共にいますと教えてくれる、だから私たちは恐れなくてよいと、神への信頼を新たに沸き起こしてくれる。そして 11 節にこういう言葉がある「力を捨てよ、知れ、わたしは神。国々にあがめられ、この地であがめられる。」このようにして、私たちが不安に打ち勝とうと懸命に力を振り絞ろうとしているところで、力を捨てよと静かに教えてくれる。自分の小さな力に頼るのはやめて、そんな力は捨ててしまいなさいと言う。この言葉は「静まれ」とか「手出しをやめよ」とかとも訳せますが、じたばたせずにはまず落ち着きなさいというニュアンスもあると思います。そのように力を捨てさせた上で、そして「知れ」と言う。わたしが神であるということを知れと言う。わたしは神だ、と神御自身が語りかけてくださるのです。神様がご自身のことを改めて「わたしは神だ」と強調される。それを知れと、お前たちがすべきことはただそれを知ることだと言われる。それはつまり、私が全能の神であるということをもう一度覚えなさいということです。この世界を創造され、歴史を支配し、やがてこの世界に終わりをもたらすことのできる唯一の生けるまことの神、わたしはそういう神なのだ、それを知りなさいと言われる。

そしてこの力ある神が、万軍の主と呼ばれる力ある方が、私たちと共におられる、その確信をこの 46 篇は繰り返し教えてくれます。「万軍の主はわたしたちと共にいます。ヤコブの神は私たちの砦の塔。」無限の力を持っておられる方、不可能を可能にすることのできる方、この世界のあらゆるものに自由に力を及ぼすことのできる方である神、その神が私たちと共にいてくださる、だから私たちは揺らぐことが無い、私たちは恐れないと、繰り返し、不安の中で縮こまってしまっている私たちの心を溶かすように、繰り返し力強く教えてくれるのです。

このような 46 篇を教会は愛し、そしてこの詩篇によって勇気と平安を与えられ続けてきた。自分の弱さを認めざるを得ない、そういう苦境にあって、ただ神の力を頼りにすることを、多くの者が教えられてきた。そしてそのような信頼に神はいつも答えて下さって、信仰者の未来を開いてくださって、力強い歩みをなさせてくださったということを、私たちは歴史の証言から知ることができるのです。

例えば有名なキング牧師です。彼は人種差別撤廃運動の指導者として 1964 年にノーベル平和賞を受賞した、教科書にも出てくる人ですが、そのキング牧師の残した「恐怖の治療法」という説教の最後にこういう証しが記されているのです。それはアラバマ州でのモントゴメリーでのバス抗議運動のさなかのこと、逮捕と数多くの脅迫電話で緊張続きだった一週間が終わって、ある大衆集会で話をした時のことです。その時彼は本当に疲れきっていて、内心は意気消沈して恐怖に打ちのめされていたけれど、表向きは力強く装ったそうなのです。でもそこに歩ラード小母さんと呼ばれている非常に献身的で信仰深い女性が近づいてきて「お前さん、おいで」と言う。そして「あんたはどうかしてるね、今夜は力強く話さなかったね」と言う。キング牧師はなおも自分の恐怖を隠そうとして「とんでもない、どうもしてませんよ、元気です」しかし小母さんの目はごまかせない。そして彼の目をまっすぐに見つめながらこういったそう

です「いいかい、私は、私らがあんと、どこまでも一緒にいてあげるとはいいやしませんよ。でもね、よしんば私らがあんと一緒にないとしても、神様があんたを見ていてくださるんだよ。」この言葉を聞いたキング牧師の思いが、この後に続けて語られています。「彼女がこのような慰めの言葉を語った時、私の中のすべてが、なまのエネルギーの波打つような震えを伴って揺れ動き、よみがえったのだった。1956年のあの夜以来、ポラード小母さんはすでに御国に召され、私はほとんど落ち着いた日々を知らないでいる。私は苦難の燃え盛る火によって、外では痛めつけられ、内では苦悩してきた。苦痛の木枯らしや、押し寄せる逆境の嵐に耐えるため、私は持てる強さと勇気のありったけを奮い起こすように強いられてきた。しかし歳月の進むと共に、ポラード小母さんの雄弁な短い言葉が、繰り返し立ち戻ってきて、私の荒れ果てた魂に光と平安と導きを与えてくれるのだった『神様があんたを見ていて下さるのだ』」このポラード小母さんの言葉の中に、詩篇 46 篇の魂が息づいているということは、もう言うまでも無いと思います。全能の神が共にいてくださる、その確信がキング牧師を励ましたのですね。

あるいは私たちは、このような信仰に生きた人として、この「七滝の小さな男」という小さな本に証しされた渡辺潔という一人の牧師を挙げることも出来ると思う。(本を読んだ経緯の説明など)。この方は、ルーテル教会の牧師だった方ですが、アメリカの神学校への留学経験もあったので、戦時中に捕虜収容所の通訳として香港に向かうことになります。そこで彼はやせこけて、ほこりにまみれた捕虜たちを目の当たりにして、心を騒がせる。そこでは捕虜たちはブタとして扱われて、怒りに任せた拷問が繰り返される。収容所の内外では、勝利におごりたかぶった日本兵たちが傍若無人な振る舞いで、現地の人々を苦しめる。そういう人間が人間らしさをまったく失っていく戦争の狂気の中で、この渡辺牧師は自分の良心を守ろうと懸命に戦う。そして収容所の捕虜たちが牧師を中心に礼拝をしているところに近づいていって、自分はこの収容所でおそらくただ一人の日本人のキリスト者だと彼らに打ち明ける、だんだん距離を縮めて行く。そんな折、収容所の中でジフテリアが蔓延して、捕虜たちが見る見るうちに弱っていく。生きている人間の体が腐っていくその悪臭が収容所をおおう。でも収容所の日本軍はそれを見ごしにして、医者から医薬品や血清を要求されても応じようとしない。そういう状況で、いよいよ渡辺牧師は覚悟を固めて、医薬品や食料を密かに運び入れるという危険を冒していく。それは日本軍に知れたら間違いなく死刑になる。そして彼を疎んじていた同僚たちのスパイ行為や誹謗中傷に苦しみながらも彼はその危険な仕事を続けて、多くの捕虜の命を救うことになる。その後、結局その収容所から追い出されて野戦病院や他の施設に異動させられたりするわけだが、それぞれの場所で、自分の良心を守ろうとして懸命に戦った渡辺牧師の記録がここに記されています。

でもこういう風にお話すると、この渡辺牧師はとても勇ましい、日本軍に敢然と立ち向かった熱血漢のように思えてしまうかもしれないが、そうではないのですね。むしろ私が特に強く思わされたのは、この人の弱々しさです。彼は本当にガタガタ震えながら、息が出来なくなるほどに心臓をバクバクさせて、医薬品がいっぱい詰まった重いカバンを運びます。看守に疑われないか、上官に見つからないか・・・あるいは同僚たちの声が聞こえてくる、「どうも裏切

者がいるらしい」「そんな国賊は叩ききってやればいい」「いや射撃練習の的にすればいい」などとわざとこれみよがしに、彼に聞こえるように言い募る声が聞こえてくる、そのたびに彼は恐れで真っ青になって、自分の部屋で、あるいはトイレに駆け込み、自分の情けなさや弱さに歯噛みして、しっかりしろと自分を叱咤する。そして、ひたすら祈るのです。この本の中で最も強く印象に残るのは、この彼の祈りです。十字架に架けられる前の夜に、ゲツセマネの園でひどく恐れてもだえながら、血の滴るような汗を流して祈られたイエス・キリストのように、彼は祈る。神が共にいてくださると、確かに心が定まるまで、ひたすら祈るのです。そのようにしていつも平安を取り戻して、彼は自分の戦いを戦い抜いたのでした。

その祈りの中で、この詩篇 46 篇の言葉が、きっと大きな力を彼に与えていた、そのように想像することは許されると思います。神はわたしたちの避けどころ、私たちの砦。苦難の時、必ずそこにいまして助けてくださる。私たちは決して恐れない、地が姿を変え、山々が揺らごうとも、海の水が騒ぎ、沸きかえろうとも。万軍の主がわたしたちと共にいます。だから私たちは恐れない。この神への信頼を新たに呼び起こされて、自分の力を捨てて、神の力を得ることができたのだと思う。

このようなキング牧師や渡辺牧師の強さは、何も特別なものではない。キリストを信じるすべてのものに与えられる強さです。キリストは神が確かに私たちと共におられる、そのことを教えるために、この世に降りてきて下さいました。そしてキリスト御自身が、その共におられる神に全てを委ねて苦難の生涯を歩みとおされ、そして神の力によって復活という命の勝利に預けられました。自分の力を捨てて、十字架で殺されながらも、神の力によって、その死から甦られたのです。そのようにしてキリストは、この詩篇 46 篇の言葉は本当なのだと、その存在と生涯全体をかけて私たちに証しして下さいました。キリストを信じることで、私たちもまた、神をそのような力ある方として知ることができる。まさに「神である方」として知ることができる。そしてその神が共にいてくださることを知り、この方にすべてを委ねることができる。それがキリスト者の確信です。そのような確信を持つ時に、人は真実の強さを持つのだと私は信じています。

私たちは様々な恐れに取り囲まれている。そこで強がって自分の力を頼りにするならば、恐れの中で自分を見失う。でも私たちは、決して尽きること無い神の力に頼ることができる。だからじたばたせず力捨てることもできます。自分の弱さを認めることもできます。最後にフィリピの信徒への手紙 4：6 - 7 節を共に読みましょう。

この人知を超える神の力に信頼する平安の中で、新たな一週間を歩んでいただきたいと思います。